

清水 今「最後から二番目の恋」というのもありますけど。

奥田 まだ、恋愛するつもりか、みたいな。

清水 昨日の佐佐木信綱研究会での講演「川田順く作品と背景」で、野地安伯さんが「茂吉は羨ましかったんじゃないか、自分ではできなかったから」とおっしゃってましたね。

朋子 あの人の実感よ。

高山 川田順はおもしろい。歌もいいし。

ああいうの、特集でやったら、絶対、楽しいと思うけど。

清水 昔の人って、面白いですね。

朋子 久松宏二さんが多分、向いていると思う。

清水 久松宏二さんの「松本初子論(前編)」『三溪園が育てたすぐれた女歌人』(佐佐木信綱研究第十一号)はすごく面白かったですね。

高山 「不儘(婦人)研究会について」(佐佐木信綱研究第十号)なども素晴らしい研究で「心の花」の女流歌人史を考える上で大切な資料になると思います。

奥田 久松洋一さんもすごいですからね。すごいメモとるし。先生のお話とかも、全部、メモを取って残してますから。

幸綱 このころ、久松洋一君が作品もずいぶん出しているね。久松洋一歌集『ビジネ

スタイアリー』は一九九四年刊。やがてそれに入る歌を作っていたころだ。

黒岩 「赤ひょうたん」で飲んでる時も、先生が何か発言されるとメモをとる。

幸綱 彼はずつと秘書室にいたから(笑)。

奥田 そのノートだけでも特集が一つ、組めるかもしれない。

清水 「赤ひょうたん」、座敷がなくなっちゃったんですよ。

幸綱 へーえ。最近か。

清水 この間、視察に行ったら、まばらなテーブル席で。

黒岩 コロナの影響もあるんだね。

幸綱 今後、東京歌会の二次会の場所を替えるかね。

清水 コロナが収まれば座敷にするのかもしれないけど。やっていけないんじゃないですか、座敷では。

高山 何となく収まりそうだったのに、また変なのが出てきて。

清水 オミクロン。

▽一九八八年、「心の花」全国大会

高山 では、改めて始めましょう。新型コロナも少し収まってきたということで、久しぶりに「ほろ酔いインタビュー」を開催することにしました。今日のメンバーは、いつもの黒岩剛仁さん、加古陽さん、奥田



亡羊さん、そして私、高山邦男、女性メンバーとして清水あかねさん、吉田瞳さん。佐佐木朋子さんにはときおり参加していただくかたちです。年表は谷岡亜紀さん、大口玲子さんが作成されたものを使います。録音、テープ起こしは吉田瞳さんです。今回は一九八八年、昭和六十三年からスタートいたします。第一のテーマとして、「現代短歌のキーワード」です。日本青年館で「心の花」全国大会がありました。